



社長と経営者は似て非なるものである！！

——中小企業は社長の病、大企業は組織の病

かつて日本には600万社の企業があったが、それが今や2009年（420万社）、2012年（385万社）、2014年（381万社）と年々減少していく傾向になっている。

由々しきことである。

この中で中小零細企業は99.7%を占めている。しかもその約70%の企業が赤字決算になっている。こちらも由々しきことである。

これらの企業には必ず「社長」がおり、その数と言えば係長や課長の数よりもはるかに多いのである。石を投げたら社長に当たると言っても過言ではない。

実はこの社長という職業は誰でもなれるのである。

社長になるには学歴も資格も関係ない。

元手もほとんど必要ない。今では「1円」で会社を作ることができる。

経験も必要ない。

創業者以外だと自分の意志に反してすら社長になってしまうこともある。

どんな人でも社長にはなれる。

まったく勉強しなくても社長にはなれるのである。

それが社長という職業である。

しかし・・・社長と経営者は似て非なるものである。「社長」と「経営者」は似ているようで、まったく違う。いくら金を積んでも「経営者」にはなれないからである。「経営者」になるためには営む間に学び、成長していく必要がある。「経営者」になるためには、自己への厳しさと寝る間も惜しんで勉強をし続けなければいけない。その心構えと覚悟の無い社長のやっている事業は絶対に長続きしない。

中小企業の業容の発展と業績はすべてその「社長」の双肩に掛かってくるからである。良いも悪いもすべてその「社長」の責任である。

そんな社長ではあるが、時として無自覚の内に「病」を罹患する。恐ろしいのは社長だけが無自覚の「病」である。そして、ほとんどの場合治療が困難であり、不治の「病」となる。

中小企業は「社長の病」だと言われる所以である。

私は社長が罹患する「病」は7つくらいあると考えているが、今回はその内の4つほどをご紹介します。いずれも社長にとっては無自覚の「病」であり、治療困難な不治の「病」となり得る。

◆傲慢病

「おごりたかぶって」周囲の人たちを見下すことである。自分が一番だと思っている。社員はもとより、取引先や社外の人にまで傲慢な態度を取っている。

◆怠慢病

当然、社長としてやらなければいけないことを怠けて疎かにしている。特に、年齢を重ねてくると小さな問題を放置する傾向が強くなっていく。それがいつしか大きな問題になってくるのも知らずに・・・。

◆自堕落病

行いや態度にしまりがなく、だらしない。社員や自分の周りには理想的なこと、厳しいことを要求するが、自分に甘い。二日酔いの時は昼から出勤。当然、周りは社長の「ゆるさ」を見ているが、何も言わずに陰口をたたき、気が付けばお山の大将は裸の王様になっていく。

◆無知の病

知識が無い、知恵が無い。勉強しない。学ぼうとしない。傲慢病が邪魔をして、謙虚に周囲の人たちから学ぶ姿勢が持てない、持たない。知らず、知らず「無知の病」に罹患してしまう。この病に罹患すると会社の中で社長が一番取り残された存在になってしまう。

知らぬは己ばかりなり！！

会社の業績が振るわなくなったら社長は自分の「病」を疑って見なければいけない。売り上げが伸びない。利益が出ない。幹部がやめる。社員がやめる。会社の中が暗い。活気が無い。

等々、負の兆候の何らかが見られる場合は「社長の病」を疑ってみる必要がある。

社長の病は社長自らが自覚し、自らが治療していくしかない。

社長は日夜、切磋琢磨して誰しもが認める本物の経営者になっていかなければいけない！！

本来、社長のポテンシャルは高いはずであるから・・・。

